

るなり」と見えて居る。世尊は佛陀の十號の一つで、十號とは何れも佛陀の徳を稱揚した異名である。曰く如來應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊。◎所説利益皆已究竟。佛陀が初め鹿野苑で「阿含經」を説かれてより、今この「遺教經」を説かれる最後に至るまで、四十九年横説堅説の一切經の利益は、既に悉く究竟し、充滿されてあるぞとの明示である。

【講話】 今までの説法で、諸の功徳は既に圓成して居る。佛陀一代所説の法門も悉く此に收まり、剩す所なく、究竟して、間隙の乗すべきものもない。最早これ以上、説き明かされなかつた法門とてもない。故にこれよりは、たゞ教のまゝに實踐習修して、無量の功徳に利益せられ、最勝の證果を體得せよ、と懇切に勧められたのが此の章である。

一心に諸の放逸を捨つる。——云々の語句が、此の章の眼目で、殊に一心に、純一無雜の精進を爲すといふことが、修行の肝要である。

徳川の中世頃のことである。東海道駿遠の間を出没する掬兒で、長四郎といふ者があつた。ある時、一人の雲水僧の跡をつけて、其旅費を掬り取らうと、道中

の茶店にも、泊りの宿屋にも、間斷なくつけ狙つてゐたが、どうしても其僧には寸分の隙も見出せなかつた。或る夜、宿屋の一室に熟睡して居る僧の油斷を見すまし、ソツと忍び入つたところが、室には僧の姿は見え、一本の大きな柏の樹が突つ立つてゐた。長四郎喫驚狼狽して跳び退いたが、これは不思議だ、此坊主は何でも魔法を使ふえらい坊主だ、こんな魔法を覺えたら、それだけでも金が盗れるわけだと考へたが、其の翌日また跡をつけて、茶店に休んだとき、僧の前に腰を屈め、自分は實は掬兒だが、是非魔法を教へて貰ひたい、と熱心に願ひ出た。僧は貴様の目的はわるいが、正直な所のあるのが面白い、宜しい教へてやらう、先づ下稽古に斯んなところから始めるがよからうと、次のやうなことを言つた。

——昔、支那に趙州といふえらい坊さんがあつた。ある時、若い坊さんが、祖師「回來の意は如何と問うたら、庭前の柏樹子だ」と答へた。どうだ、貴様わかつたか。此柏樹子が解らぬうちは、魔法は習へぬぞ、家に歸つて一心に考へて見よ——

長四郎は呆氣にとられたが、魔法を習ひたさの一心から、家に歸ると早速妻子を退け、風呂桶の中に潜り込んで、端坐し、寢食を廢して、柏樹子を考へた。一心窮ま

るところ、ついに此公案を明らめ得た。公案が明らめられると、廓然として本地の風光に接して、そこに佛性の輝きを見、忽ち従來の非を覺つて、甦生の新人格が現はれた。彼はそれ以來、正業に就いて精勵し、妻子を愛養するやうになつたが、後には渾然たる君子の風貌を備へ、隣里を感化するまでになつたといふ。その身が實際に世の怨賊であつた長四郎が、その怨賊の業を離れたのみならず、内面の怨賊を殺して、立派な得道者になつた。一心に放逸を捨つるの工夫を爲した好適例である。

二 無爲の徒を誡む

汝等但當勤而行之。若於山間若空澤中。若在樹下閑處靜室。念所受法。勿令忘失。常當自勉精進修之。無爲空死。

汝等但だ當に勤めて之を行すべし。若しくは山間若しくは空澤の中に於ても、若しくは樹下閑處靜室に在つても、所受の法を念じて忘失せしむると勿れ。常に當に自ら勉めて精進して之れを修すべし。爲す

後致有悔。我如良醫知病說藥。服與不服。非醫咎也。又如善導導人善道。聞之不行。非導者過也。

と無うして空しく死せば、後に悔いあるとを致さむ。我は良醫の病を知つて、藥を説くが如し。服すと服せざるとは醫の咎に非ざるなり。又善く導くもの、人を善道に導くが如し。之を聞いて行かざるは、導く者の過に非ざるなり。

〔字解〕 ①山間と空澤と閑處と靜室。此は皆謂ゆる憤闘を離れ、動念忘失を避くるに好適の場所である。②念所受法勿令忘失。戒にせよ、定にせよ、その他如何なる教へにても授けられたる教法はすべて靜處に在つて更に審思觀念して忘失せしめざらんと努めねばならぬ。③無爲空死。後致有悔。徒らに身口意の三業を荒蕪して全く修行せず、若しくは、少分の法を學得して、更に進取向上を勉めずして、解脱の眞法を了得せざる如きは、共に爲すことなうして空しく死する者で、此の如きは、最後臨終の際に於て、必ず效なき悔恨悲痛の苦を嘗めねばならぬ。④良醫知病說藥。解脱の眞法を説いて諸の迷妄を破するに譬ふ。⑤善導

法を説いて、能く善を生ずるに喩へたもの、前喩と對を爲す。

【講話】 前章の本文の如く、佛陀所説の教法は、既に究竟し、遺すところは無い、後進の教徒は、たゞ教の通り勤め行へばよい。山間可なり、空澤可なり、閑處靜室可なり、すべて喧雜を避くる適宜の道場に於て、受け得たる諸法を、如實に、專念に實修體得すべきである。忘失せしむること無れの語、徹徹親切を極めて居る。よのつね欲界の衆生は、皆靜を棄て、動に趨るが故に、たとひ法を受くるとあるも、恰も漏器の如く、多くは忘失してしまふ。故に佛陀は懇諭を重ねて、靜處に在つて、觀法專修せしめられるのである。所受の法を觀念せずして忘失せしむるものは、即ち無爲空死の輩で、常に靜處體得に勉めず、動念散亂して、欲境に轉せらるゝが故に、恍惚として一生所得なく、臨終に瀕して、臍を噬むの悔を貽す。

〔雜譬喻經〕にも、二人の學問僧の話を擧げて、此の意味が誠められてゐる。

兄と弟、共に佛道に志し修行にかゝつた。兄は一心に禪定を修し、専ら實究の工夫を凝らしたので、幾程もなく羅漢果を證し、六神通を得た。

弟の方は、博學多才、一概に學解を以て世に誇らんとした、その名聲は忽ち隆々

として四方に聞えわたつたが、道念の一事は到底兄には及ぶべくもなく、六神通も得られなかつた。

兄は、弟の邪路に傾かんとするを見て、友愛の情禁じ難く、早く名聞を捨て、眞實の道を研げど、切々に注意を與へ、反省を促した。しかも弟はそれを馬耳東風と聞き流し、坐禪觀法にのみ浮身をやつすは、丈夫の事でない、空嘯いて居るのであつた。

兄は重ねて、人身受け難く、佛法値ひ難き道理を懇々と説き、禪定を修して大安心を得よと、諭したが、弟は依然として耳を傾けなかつた。其うちに弟は病にかゝり、宿命盡きて往生間際となつた。此に至つて始めて驚き恐れ、兄を呼んで、其平素の忠言を用ひなかつたことを悔み、悲んだが、兄も如何とも出來ず、弟はそのまま、正覺を得ずして命終した。

兄は入定して、弟が如何なる處に轉生するかと觀じて、其の某長者の婦人に托胎したことを知つた。其長者の家が寺の近くに在るにより、兄は其の寺の附近に居を移し、いつとなく長者と親近し、他日弟の生れ出づるを待つて、貰ひ受けて

弟子としようと思つた。

長者の婦人は男兒を生んだ。乳母が一日其の兒を懐いて寺の石段を上らうとして居た際、過つて手を外づし、其兒を石段に落した。兒の頭は石に打つたつて重傷を負ひ、即死してしまつた。

兄の聖者は再び入定して觀するに、今度は彼が臨終の際に、一念乳母に對して曠恨を懐いた爲に、業縁を生じ、地獄に墮したとわかつた。兄は大に落膽した。地獄の苦は三世諸佛も救ふことを難しとするところ、最早自分の力では如何ともすることは出来ない、悲嘆の涙に咽ぶのみであつたと。

無爲空死の意味は眞に道を得ず、大安心を得ずして一生を終ること、如何に學識辯才ありとも、如何に事理の法を解了すとも、自己の本心に大覺悟が定まらねば、畢竟無爲の徒である。大覺悟他なし、自分が果して成佛出来るか如何といふ大決心である。

蓮如上人の語として有名な

それ八萬の法藏を知るといへども、後世を知らざる人を愚者とす。たとひ

一文不知の尼入道なりといへども、後世を知るを智者とす。

とあるのも、正しく此の道理で、他力の信心によるにせよ、自力の修證によるにせよ、決定大安心を得るにあらざれば、たとひ千萬卷の經典を讀破し講明すとも、徒に兒戯に類するものと謂はねばならぬ。

禪門で

此の身、今生に度せずんば、更に何れの生に向つてか此の身を度せん。

と、常に強く策勵する所以も、亦實に此に存するのである。

良醫と善導の二喻、佛陀大慈大悲の教諭、眞に感謝し隨順しなければならぬところ、而も凡夫衆生、斯の海岳の佛恩に辜負し、之れを受けて服せず、之れを聞いて行かず、自業自得の果を招く、悲しむべきではないか。

## 第五段 決定證成

### 一 懷疑の者を誠む

汝等。若於苦等四諦。有所疑

者。可疾問之。無得懷疑不

決也。爾時世尊。如是三唱。人

無問者。所以者何。衆無疑故。

汝等若し苦等の四諦に於て疑ふ所有る者は、疾く之れを問ふべし疑を懐いて決を求めざることを得ること無かれ。爾時世尊是くの如く三たび唱へたまふに、人同ひたてまつる者無し。所以何となれば衆疑無きが故なり。

【字解】

●苦等四諦

苦集滅道の四諦(四諦の解説は前二四頁に出づ)

●可疾

問之。疾は非常にハヤキ意、世尊は涅槃を急がれる。疑あらば急速に問うて解決せよと促されるのである。●無得懷疑不決也。疑は信の反對である。佛道の證果は信得に在る、疑があつては佛道は得られない。●如是三唱。佛陀大慈悲のあまり、三度迄疑なきやと質されたのは、即ち念に念を押されたのである。●人無問者。一座の大衆、皆既に四諦の法を信受するが故に疑を懐くものではない。

【講話】 此の章は、佛在世の時に於て、多くの佛弟子達が悉く四諦の妙理を證得

して一人の疑を懐く者なかつたことを明示したもので、以て後來の一切衆生もまた此の四諦の法に於て、些の疑を懐くなかれとの教意を伺はれるのである。

四諦はこれ比丘が苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修する法で、大乘の比丘も小乗の比丘も、等しく稟け學ぶことろの法門である故に四諦に於て疑義なきは一切法門に於て皆疑義なき所以である。是れ佛陀が時に涅槃に入らんとするに臨んで、慇懃に告げて、以て疑問を誘はれた所以である。

佛陀は元來、他心通によつて、大衆が悉く四諦の理に於て疑問のないことは、明かに知悉して居られねばならぬ。然も疑を質せし三度まで勧めたまふところ、洵に大悲心、已む能はざる至情に出でたもので、佛子として苟も這般の消息を伺ふもの、管に一片感激の情のみにして止むべきものならんやだ。茲に當に大信根を樹立し、大勇猛心を振ひ起し、眞道に遊戲して、以て佛陀の暖皮肉を値遇頂戴すべきである。

## 二 分別決定を顯示す

時阿菟樓駄。觀察衆心。而白。佛言。世尊。月可令熱。日可令冷。佛說四諦。不可令異。佛說苦諦實苦。不可令樂。集真是因也。更無異因。苦若滅者。即是因滅。因滅。故果滅。滅苦之道。實是真道。更無餘道。世尊。是諸比丘。於四諦中。決定無疑。

時に阿菟樓駄衆の心を觀察して、佛に白して言さく、世尊、月は熱からしむべく、日は冷かならしむべくも、佛の説きたきふ四諦は異ならしむべからず。佛の説きたまふ苦諦は、實に苦なり、樂ならしむべからず。集は眞に是れ因なり、更に異因なし。苦若し滅すれば、即ち是れ因滅す。因滅するが故に果滅す。滅苦の道は實に是れ真道なり、更に餘道無し。世尊、是の諸の比丘、四諦の中に於て、決定して疑無し。

【字解】 ●阿菟樓駄。これは前に睡眠の因縁の條下に、事例に引いた阿那律尊者のことで、天眼第一を以て、佛陀十大弟子の一人に數へられる聖者である。通常他の經典には、大抵阿那律の文字を用ひてあつて、この「遺教經」の外には「阿彌陀經」などに、阿菟樓駄と書かれてある。漢譯すれば、無貧とか無滅とかの意味にな

るといふ。此尊者、前世の因縁に、曾て大饑饉の世に遇ひ、一食を緣覺の聖者に施した。其功德によつて、九十一劫といふ無限の長時にあたりて、人間天上の果報を受け、常に福樂を得て、其の福滅することなく、未だ貧しいといふことがない、説かれてある。 ●觀察衆心。大衆はその心中既に些の疑なきことを、佛に答へんとは思ひながら、恐懼して敢て發言するものがない。天眼第一の阿那律尊者は、これを明かに觀察して、衆を代表して佛に白すのである。 ●月可令熱。日可令冷。月をして熱からしめ、日をして冷かならしむることは、有り得べからざることであるが、有り得べからざるものが、縱しあり得ようとも。 ●佛說四諦不可令異。佛説は眞實不虛にして、萬代不易であると、假説を對照して強く證言したのである。 ●佛說苦諦實苦。以下四諦の法の一々を擧げて、更に詳説し。 ●實是真道。更無餘道。と佛陀一代説法の意義も、此に究竟せる所以を述べ。 ●決定無疑。と證明し、佛陀最後の大悲大慈に對へたのである。

【講話】 此の章は前章の衆疑無きが故なりの意を更に宣明するので、佛陀の説を信受して、弟子達悉く道果を證し、決定して動かざるに至れる所以を、特に分

別して顯示したものである。阿菟樓駄は此の時に於ける、一座の上首であつたので、大衆を代表して佛陀に對へた、恰も家に於ける慈父臨終の際、懇々と遺言されたに對し、長男が多くの弟妹達に代つて、父の言葉を遵奉する意を進言し、逝かんとする父に安心を請ふ形である。

日月冷熱の性は變易あるべきものでないが、たとひ其れが反對に轉移するやうなことがあらうとも、佛の説きたまへる四諦の法は眞實にして萬古不易である。佛説の眞理にして些の疑ふべき間隙なき所以を、強く宣揚し、以て大衆の淨信を徹底せしめて居る。

四諦の法は前に解説した通り、苦樂因果の相關を明し、苦の原因を除き去つて常住安樂の結果を得る修證に就て、四種の觀法を説いたもので、第一觀法は現在迷の境涯は眞に是れ苦で、これを樂といふことは出來ない。而して第二觀法によれば、この苦は集の因より來る果である。集を外にしては、他に苦の因あるべからず、故にこの苦若し滅するとき、其の因おのづから存し得べきでない。第三觀法は、此の苦の因果共に滅した果をいふので、苦滅するところ、即ち大安樂境で

ある。第四觀法は此の大安樂境に到達すべき道法で、即ち上來説かれたる八正道、約むれば戒定慧の三學、この道を措いて、他に滅苦の道はない。滅苦の道は、寂靜無爲の窮極理想に到達する眞道である。斯くの如き四諦の妙理は、この諸の比丘、既に悉く解し得て、決定的に疑ふところはない、世尊よ安心あれといふのが阿菟樓駄の語である。

さて如上四諦の理は、畢竟、迷悟苦樂の關係を、爾重の因果觀を以て示されたものであるが、因と果を明らむる上に、是非心得て置かねばならぬのは、之れが相關法たる縁といふことである。

稲種いねたねは米となるべき正しき因には相違ないが、之れを戸棚の中に大事にし、まひ込んで置いたのでは百年たつても決して米の果は穫られない、雨露水土の縁即ち之れを田に卸し、日光や風雨や澆水やの助けによつて、始めて稻が育ち秋の收穫が見られるのである。四諦の聖道により、因滅するが故に果滅す、滅苦の道は眞道なり、と諦觀し、決定して疑ひなしといふ信念の確立も、必ず斯の縁を透してあることを忘れてはならない。

釋尊が或る時江邊に在つて說法せられたとき弟子達を顧み、汪洋たる江水を指して言はれた。汝等今拳大の石を執つて水中に投じたならば、其の石は浮くか沈むか。弟子達は仰せまでもなく、石は直ちに沈みますと應へた。釋尊更に、然らば方三尺の石を投じたならば如何にと重ねて訊ねられた。「同じこと忽ち沈みます」といふと、然り石を其のまゝ水に投ずれば必ず沈むであらう、然るに茲に三尺の大石を水面に浮べ得る法がある、汝等これを知るか」と、釋尊の此の奇問に弟子達は即答が出来ないで一寸考へて居た。釋尊は諄々として教誨せられた。「石の沈むは縁なきが爲めである、石が若し善縁を得るならば、能く江上に浮んで沈まざるのみならず、濡れも濕りもせぬであらう」と。

舟と船頭の善縁を得れば、三尺五尺の石はをろか、二丈三丈の巨岩でも、能く水上に浮んで沈まざることを得る。苦の果を見て苦の因を知り、寂滅の果を望んで、正道の因を明らむる修行に於ても、眞に能く決定して疑なきに至らんには、必ずや善知識の良縁により、信念の舟に乗つて彼岸に到る消息を知るべきである。佛法の大海は信を能入となす。

信は道の元、功德の母なり。

なご、説かれてある。疑の正反が信、信あるところに疑はない。先づ信せよ、佛の教を信じ、正道を實修せよ、淨信一たび現するとき、即ち決定無疑のところである。

### 第六段 斷疑證成

#### 一 未辨の者を誠む

於此衆中。若所作未辨者。見佛滅度。當有悲感。若有初入法者。聞佛所說。即皆得度。譬如夜見電光。即得見道。若所作已辨。已度苦海者。但作是

第六段斷疑證成

此の衆中に於て、若し所作未だ辨せざる者は、佛の滅度を見て、當に悲感有るべし。若し初めて法に入る者有らば、佛の所説を聞いて、即ち皆な得度せむ。譬へば、夜、電光を見て、即ち道を見ることを得るが如し。若し所作已に辨じ、已に苦海を度る者は、但だ



念。世尊滅度。一何疾哉。

是の念を作さむ世尊の滅度、一へに何ぞ疾なるやと。

【字解】 ○所作未辨者 修業の未だ十分に作し遂げ得てゐない者、須陀洹と斯陀含と阿那含と、此の三果の道法修習中にして、未だ最上の阿羅漢果を證得せざる者は、すべて所作未辨の者である。第一は見道の位、第二と第三とは修道の位、而して第四の阿羅漢は無學の位、即ち學ぶべきを學び盡して、最早學ぶべき道法もないといふべき最上果で、比丘たるもの、窮極理想境である。○當有悲感 前の三果の人は、欲の殘思といふ煩惱を、未だ斷じ盡してゐない爲めに、情愛に惹かれて佛の滅度を悲み歎く、滅度は即ち涅槃で、究竟の眞道悲感すべきものでない、滅苦の眞道を得た者ならば、讚歎せざるを得ない筈である。○初入法者 全然佛道に於ての初入者、前三果の人々は、所作或る點まで辨じ、或る點が未辨であるが、此は全く不辨の人である。○得度 凡位より聖位に入ると。○夜見電光 その頗る迅速なるに譬ふ。○即得見道 所作或る點まで辨する者、鈍根ならば残りの或る點に於て依然として未辨で居るが、初入の者といへども、利根ならば

初めて佛の所説を諦聽して、一躍轉凡入聖の樂果を得る、暗夜に閃く電光に依つて、即座に進み行くべき道を誤りなく見得る如きものである。○所作已辨 此れは既に極果を得たる阿羅漢のこと。○世尊滅度一何疾哉 見思二惑を斷ち情愛 惹くものなく、滅度に對し何等の悲感も起さない。たと佛の滅度の思ひがけなく疾きを驚歎するのみである。

【講話】 此の章は前の阿耨樓駄の語のつゞきである。前章に既に「是の諸の比丘四諦の中に於て決定して疑なし」と證言してありながら、此の章に於て、更に未辨の者を誡む、といふは妙に聞えるが、前章の意は、總体の弟子達の上に於て、四諦の妙理を疑ふ者はないといふので、此の章に於ては、更に別して未だ上々證の極地を體得して居らぬ者の爲めに、その疑念を斷除せしむるといふ意味である。文おのづから三節に分たれる。「若し」の字で明かに區切られてゐて、初めに所作未辨を擧げ、次に初入者を擧げ、終りに所作已辨者を擧げて、修證の淺深優劣を示されてある。

佛の十大弟子中、多聞第一を以て稱せられた阿難陀尊者は、佛滅後、一代所説の

聖經を結集するときに、三十年間親しく佛に侍して聽聞した説法を、一々口誦したといふ、頗る聰明な人であつたが、佛在世中には、未だ四諦の中の集諦が滅盡されてゐなかつた。即ち娑羅雙樹の佛涅槃の會上に於ては、本文に謂ゆる所作未辨の人であつた。所作未辨で、煩惱未だ盡きざるにより、喜怒哀樂の情念が除かれてゐない。爲めに大恩教主の滅度を見ては、悲感やるかたなく、いよ／＼佛の入滅となるや、阿難陀尊者は、悲泣慟哭して、氣絶したと傳へられて居る。

然るに初めて法に入る者、即ち首章序分にあつた通り、須跋陀羅の如きは、此の時始めて佛に謁し、佛の説法を初めて聽いたのであるが、言下に大悟して阿羅漢の勝果を得たのみならず、その場で佛に先立つて入滅してしまつた。恰も夜路に電光を見て行くてを正しく見得たる如く、實に其の修證は迅速である。所作未辨の者は、徒らに悲感あるのみであるが、全く無辨の者といへども、利根にして勝縁順熟するところ、一超直入、所説を聞いて皆得度す。大悟徹底は、眞に閃電光擊石火の様子である。

昔一人の長者があつた。長者に一人の男兒があつたが、眞に一粒種の愛兒で

あつた。隨つて其の恩愛の情も異常なものであつた。所が此の兒が不圖したことから病み付き、醫者よ藥よ、祈禱よ、まじなひよと、あらん限りの手を盡したが定命にや、其の兒は九歳を一期として夭死した。

長者夫婦の歎きは形容も出来ないほどであつた。明けても暮れても爲すことなく、たゞ死兒の齡を算へ、百味の飲食を供へ、靈前に大聲をあげて泣きくづれてゐた。

ある日、長者の家の門前で、多くの人々が騒ぐので、長者も出て見ると、八九歳ばかりの子供が一頭の牛を牽いて來たが、其の牛が何の病ひでも、長者の家の前で頓死した。子供は兩手にみづ／＼しい青草を執つて、倒れて居る牛の口先にさしつけ、鞭をあげて牛を打ち、「コラ／＼早く起きて此のうまい草を食へ」と頻りに呼んで居る、それを見て大勢の人々が其の愚を笑つて居るのであつた。

「ハ、ア、此の兒は氣ちがひか、馬鹿か」

長者も思はず感笑した。ところが、それを聞くと、其の兒がカラ／＼と笑ひ返して云つた。「いや、さういふあなたが馬鹿か、氣ちがひか、如何にも此の牛は死んで

居る。しかしまだ此の通り口がある。それでも此のうまい草を食はない。どうです、あなたのお子さんは、死なれてから幾日たちますか、しかも茶毘の煙となつて姿形もない。それに何ですか、百味の飲食を供へて毎日オイ／＼泣いて居る。お子さんが、ごそれだけの御馳走をたべますか。私の所作が、かしいといふよりは、あなたのなさる事が、餘程辻褄が合はないでせう。」

長者は小兒の此の言葉に、飄然として悟るところがあつた。

人生死は最大の不幸であり、最大の悲劇である。と現に世俗一般に相場がきまつて居る。死兒の供養を爲して、牧童の嗤笑を招く連中は、世間に到る處に見られる。しかし悟れば本来空、死や全機現、生や全機現、生死涅槃もと不二の玄理が諦觀し得られる道理あることを知らねばならぬ。

有名な波斯匿王が、其の慈母九十歳にして長逝したとき、慟哭悲泣、顔色憔悴の有様であつた。釋尊はこれを憐んで教誨せられた。

「大王よ、古より今に至るまで、大に畏るべきもの四あり。即ち生あれば茲に老を招き、かくて病にかゝれば光澤なく、死すれば即ち神去つて親族別離せねばな

らぬ。人ご萬物とを論せず、無常の此の世に、永久に存することは不可能のことである。猶ほ河の流れて止まざるが如く、人の命も馳疾して休むことはない。此の偈を記憶せられよ。

如<sub>二</sub>河駛流<sub>一</sub>。往而不返。人命如是。逝者不還。

大王よ、世は皆この通りである。千万年の長生とては、決して望み得られるものでない。往昔の大王は勿論、五通の仙人も、諸佛如來も、皆過ぎ去つて、一人として世に留まるものはない。されば徒らに悲傷して、わが形骸を損することは決して善事でない。それよりも亡き大夫人のことを思はるゝならば、努めて善行を爲し、福德を積まれよ。大夫人を慕ふ誠心を傾けて、徳を積まるゝこと、これに越した追福はない」

と、王は佛誨に始めて、迷霧を拂ひ、悲しみより喜びへの光明を認め、いみじき道跡を得られたことである。

聖道に於て、所作未辨、已辨を論するに及ばない、在家出家ともに先づこれらの話頭を身に直接して、最も眞面目に實究することが急務であらねばならぬ。

一一 法性常住の理を示す

阿菟樓駄。雖說是語。衆中皆悉了達。四聖諦義。世尊欲令此諸大衆。皆得堅固。以大悲心復爲衆說。汝等比丘。勿懷悲惱。若我住世一劫。會亦當滅。會而不離。終不可得。自利人。法皆具足。若我久住。更無所益。應可度者。若天上人間。皆悉已度。其未度者。皆亦已作得度因緣。自今以後。我

阿菟樓駄。是の語を説いて衆中皆悉く四聖諦の義を了達すと雖も、世尊此の諸の大衆をして、皆堅固なることを得しめんと欲して、大悲心を以て、復た衆の爲めに説きたまふ。汝等比丘、悲惱を懐くこと勿れ。若し我れ世に住すること一劫ならむも、會ふものは亦當に滅すべし。會うて而も離れざること、終に得べからず。自利利人、法は皆具足す。若し我れ久しく住することも更に所益無けむ。應に度すべき者、若しくは天上人間、皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者も、皆亦已に得度の因縁を作す。自

諸弟子。展轉行之。則是如來法身常在而不滅也。

今以後、我が諸の弟子、展轉して之れを行せば、則ち是れ如來の法身常に在して滅せざるなり。

【字解】 ●説是語 前二章の文が阿菟樓駄の語である。 ●四聖諦義 聖は正に同じ、四諦を四正諦、または四審諦といふ。 ●皆得堅固 既に四諦の義を了達すとも、猶ほます／＼堅固不退轉の域に入らしめんと、佛の大悲心である。 ●勿懷悲惱 勇猛精進せよとの激勵の意味である。 ●一劫 劫は梵語劫簸の略、無分別時と譯し、また大時を劫といふとの解もある。 四十四里四方の石があつて、天人が千年に一度天降つて羽衣で一つ、すうつと撫でる。斯くして其の石が擦り切れて無くなつたのが一劫だといふ、全く想像も及ばぬ無限大の時間を云ひ現はす語と見ればよい。 ●會亦當滅 四大合し、五蘊會うて此の身を成す、四大散じ五蘊離るれば、此の身は即ち滅する。 ●會而不離終不可得 既に聚會すれば必ず離散するは天の法則である。生ずるものいつか滅せざるはなく、會ふ者つひに離れざるを得ない。 ●自利利人法皆具足 自利は自分の得果、利人は他

人を濟度すること。佛四十九年說法によつて自ら證得し、亦他を證得せしむべき、自他二利の法は既に圓滿具足せるをいふ。◎久住無益。これに二様の解釋がある。諸佛の世に住せらるゝは住はどゞまる義、說法利生の爲めであるが、今はその說法利生も十分濟んで、二利圓滿の法既に具足したことであれば、此の上は世に住するのは無益のことである、といふのが其の一。又、佛若し久しく世に住したまふときは、衆生が難値難遇の想を起さずして、佛はいつも世に在すものと思ひ、專念歸趨するをせしなくなる、故に無益といふ、之れが二の解釋である。しかし第一解のみで足ると思ふ。◎若天上人間。若しくは天上、若しくは人間といふの略と見ればよい。◎皆悉已度。天上と人間と、別して近きものを擧げていつたので、得度のもの管に此の二者のみならず、他の修羅、畜生、餓鬼、地獄の四趣の衆生に至るまで度すべきものは皆悉く已に度すの義と見るべきである。◎得度因縁。佛の說法を直接聽聞せずとも、間接に傳聞するとか、または法は聞かずとも、佛の面相を拜したとかいふ類、すべて得度の因縁をなすもので、いつか入道證果の期のあるものである。◎展轉行之。佛の直弟子は之れを後弟子

に傳へ、後弟子は之れを後々弟子に傳へ、順次相傳相承して、佛所説の法を身に行ふのである。◎如來。此は佛陀十號の一であることは前に出た。眞如より來れりとの義である。眞如といふことは、眞は妄ならざるに名づけ、如は變らざるの稱と解釋されて、宇宙萬有の本源本體と見ればよい。佛陀は此の本體の妙徳妙用を體得せられたものといふので、如來の尊號を稱するのである。◎法身常在而不滅也。初章の「若し我れ世に住する」とも、此れに異なること無けむ」と貫通し照應する語である。佛陀といへども、其の肉身は普通人間と同じく、五蘊の積聚であれば亦滅するは當然であるが、今いへる如く眞如の妙徳妙用を體得された如來で、その肉身は滅するとも、其の説かれたところの眞理が存する以上、即ち佛陀未だ滅せずといひ得べき道理がある。法身といふのは、肉身に對していへる語、即ち常在不滅の理體と見ればよい。必ずしも、後世に發達した法報應の三身説に當てゝ釋するの要はない。

【講話】 前章、前々章の如く、一會の上首たる阿菟樓駄が、大衆を代表して、衆中皆悉く四諦の妙義を了達せることを證明されたが、佛陀は尙ほその上にも、大衆を

して皆堅固なることを得しめ、正法を徹底會得せしめ、上々證を得て能く不退轉ならしめんと、更に復た衆の爲めに説きたまふので、深切の上の深切、實に大慈大悲のほど感戴すべきである。

「汝等比丘、悲惱を懐くこと勿れ、わが滅度を見て悲しみ惱むことをするな。」我れ世に住すること一劫するとも、會ふものは亦當に滅すべし。我れ今後無限の長時、世に留まつて、如何に説法救済するとも、會ふものは必ず離る。因縁によつて生ずるもの、亦因縁散すれば必ず滅する。此の事實は如何ともすることが出来な。い。會うて而も離れざることは終に得べからざる。の道理を徹底悟了せよと、此は前にいへる未辨の人々のために諭された語で、今將に涅槃に入らんとする佛陀が、最後まで止みがたき老婆親切である。

次に「自利利人、法皆具足す。若し我れ久しく住するとも、所益なけむ」わが一代四十九年の説法に於て、われ自ら體得せる眞理を、衆生をして亦われの如く體得せしめ、自他二利圓滿すべき法は皆具はつて居る。此の上に最早われ此の世に存生するも無意義のことである。われの世に存するは、此の眞道妙理を説いて

衆生を濟度せんが爲めであつたが、今や天上も人間も皆悉く度し、其の未だ度せざるものも皆亦得度の因縁を作す。わが出世の目的は既に達せられたのである。と、此は前にあつた初めて法に入る者と、所作既に辨じたる者とのために、更に駄目を押して諭されたのであつて、是れ亦佛陀徹悟の親切である。

斯くて、佛陀出世の本懐も満たされ、化導の法は既に悉く完具されてあるにより、「今より以後、我が諸の弟子、展轉して之れを行はよ、即ち是れ如來の法身常在して滅せざるなり」と結ばれた、此の一節、實に佛徒たるもの、寤寐にも忘れてはならぬ有りがたき佛勅である。

楠正成といへば、忠節奉公の權化、否な忠義そのもの、やうに、直ちに吾々國民の頭に浮べられるが、楠公、櫻井驛に其の子正行を招致し、一意父の精神を以て精神とすべき訓諭を遺した、而して小楠公は父の遺訓の通り、その精神を體現した。これ楠公、湊川に死して、更に楠公ありと云ひ得べく、更に爾後幾多の志士義人が、楠公の誠忠を感銘して奉公の至誠を献げた、近くは廣瀬中佐の如き、乃木將軍の如き、これら楠公の精神を精神とする者、末世に絶えざるを見れば、之れを以

て楠公未だ死せずと謂ひ得られるではないか。「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑石、瀛として千古の下、英氣を存するところ、忠臣楠公、七生はおろか千古常に在つて滅せずと謂ひ得られるではないか。

佛陀大慈大悲の遺教、佛徒これを如法に遵奉し、如實に修行するところに、如來の法身常に在して而も滅せざる道理、眞に諦觀せられねばならぬ。「法華經」には一心に佛を見たてまつらんと欲せば、自ら身命を惜まざれ。時に我れ及び衆僧俱に靈鷲山を出でん。

と説かれてある。佛道修行は、不惜身命、眞劍であらねばならぬ。眞劍な熱烈な求道者にして、始めて佛陀の教勅を遵行し、佛陀の廣大なる慈悲の懷に抱かれることが出来る。即ち佛陀の精神を精神とし、佛陀の教のまゝに修行せば、千萬年未法の世に在つても、直に佛陀と相見することを得る道理である。

三 重ねて有爲無常の相を説く

是故當知。世皆無常。會必有。是の故に當に知るべし。世は皆無常なり。

離。勿懷憂惱。世相如是。當勤

精進。早求解脫。以智慧明。滅

諸癡暗。世實危脆。無牢强者。

我今得滅。如除惡病。此是應

捨罪惡之物。假名爲身。沒在

老病生死大海。何有智者。得

除滅之。如殺怨賊。而不歡喜。

【字解】

○勿懷憂惱

會ふ者は必ず離る

會ふものは必ず離るゝことあり。憂惱を

配するなどの意である。

○世相如是

此の世の實際の有様は

此の世の實際の有様は、千劫萬劫經るこ

も、生者必滅、會者定離、實に無常の事實を如何ともすることが出来ない。

○早求解脫

斯かる無常遷流の世間から脱れる工夫をせよとの意

○癡暗 愚癡蒙

味にして事實の真相を觀得ないもの、即ち惑業煩惱そのものをいふ。◎危脆。危險輕脆アヤウク、モロキこと。◎牢強。堅牢剛強、カタク、ツヨキこと。◎我今得滅如除惡病。惑業苦の積集たる此の身心に執着して居るのが凡夫であるが、其は厭ふべき惡病を護持して居るやうなもの、佛陀は今その惡病を除滅して、大安樂の寂靜境に入るべく、此の身を捨てられるといふのである。◎此是應捨罪惡之物。この身あるは煩惱惡業の招くところ、即ち罪惡のかたまりで、應に捨つべきものである。此の身を捨つるは、同時に法といふ貴きものを捨ふ所以である。◎老病生死大海。老病生死を四苦といふ。人生に於ける苦の總稱と見るべきもの、惑業絶えざる身は、出生入死輪廻して此の四苦の業海に没在し、浮ぶ瀾もない。◎何有智者得除滅之如殺怨賊而不歡喜。正法を聞かず、業縁ごんげんに業縁を重ねて居る者は、愚者である。法を聞き、世の無常を知り、此の身の虛假なることを明むる者は、智者である。愚者は法の貴きを知らずして、捨つべき罪惡の此の身を捨つることを憂ふ。智者は正に之れに反し、賤しきものを捨て、貴きものを得る。その捨つべきを捨つること怨賊の如く、其の得んと欲するものを得ることを得る。

どを無上の歡喜とするのである。

【講話】 此の章は、前章に接續して、法身は常住であるが、肉身は無常なるものであるとの道理を説示し、上來屢々教誡せられたものを、重ねて示され、精進辨道して、早く解脱を求むべきことを勸奨されたのである。

〔八大人覺經〕に

世間は無常國土は危脆、四大は苦空、五陰は無我、生滅は變異、虛偽は無主、心は是れ惡源、形は罪藪と覺悟せよ。是くの如く觀察すれば、漸く生死を離る。と見えて居るが、正に此の章と同じ教意で、此の章と共に拜誦し、玩味すべき金句である。

無常といふ語は、前に第二段第二章第三節のところ(八四頁)で解釋した。また此の書の姉妹著たる「四十二章經講話」第十九章(一三一頁)にも詳説してあるから、參看せられたい。要するに諸行無常で總ての事物の、日夜に遷化流行しつゝあるといふことは、何人も明白に知る世の事實である。此の變化極りなき不安定の境から脱れて、常住不變の大安樂地に趣かんとするのが、佛教の目的で、之れ



を出世間とも出離とも解脱ともいふのである。

本文初めに「世は皆無常なり會ふものは必ず離るること有り」と世の無常を説き、しかしながら徒らに心配するな憂惱を懐くこと勿れ世相是くの如し是れ世間當相の動かすべからざる事實であるぞと遠觀せしめ而して當に勤めて精進して早く解脱を求め智慧の明を以て諸の癡暗を滅すべしと諭されてある。如來の法身は常住不滅であるから無常の風の吹き及ぶ筈はないが世は實に危脆なり牢強なるものなし此の世は實に草露の如く脆く頼み難きものである、「我今滅を得ることこれ佛自身を以て其の例證とせられたもので以下更に惡病を除くが如く怨賊を殺すが如く」することの二喻を擧げて此の無常世間の厭離すべきものなること及び解脱寂靜地の如何に歡喜すべき安穩境なるかを對比して、惡説せられて居るのである。

「雜譬喻經」に巧妙な喩が出て居る。昔海邊の一大樹に五百の獼猴が棲んで居た。或るとき大海の彼方から雪山のやうな一大聚沫が海潮につれて海岸へ漂着した。その沫の山には旭が照映して、えも云はれぬ美しさであつた。獼猴と

は之れを見てキャツ／＼と騒ぎ立てたが、氣の早い一匹は、イキナリその山目かけて飛び込んだ。その一匹がいつまでたつても出て来ないのを見ると他のもの共はこれにはテツキリあの山の中に非常に好い物があるので、獨りでうまいことをして居るに違ひない、それ遅れて損するな、とばかり、吾も／＼と續いて飛び込み、五百の獼猴は一匹も残らず、無惨の溺死を遂げた、といふのである。

觀じ来れば、此の身此の世は實に泡沫の如く危脆なものである。年々歳々花相似たるも、歳々年々人同じからず、朝の紅顔は夕の白骨となる、此の脆き無常の事實を見ながら、徒らに五欲の樂みに耽つて、精神の安住處を求めようとしなさい。凡夫衆生は、かの聚沫の山に飛び込む獼猴の愚と擇ぶところは、ないではないか。若し一たび無常の世相を諦觀し、此の身は猶ほ泡沫の如しと見るならば、此泡沫今にも解けて水となること、證られ、解けぬ前に早く解けた後の準備をせねばならぬといふ自覺が、必ず生ずるものである。是れ即ち宗教的信念の第一歩で、佛法の入門は無常觀よりすると説かれる所以である。

釋尊が修行時の時、或る山谷に於て修行して居ると、何れよりもなく「修行無

常是生滅法』聞えた。此の二句を聞いた釋尊は、後の句を是非知りたいたいといふ熱烈な求道心から回邊を探し求めると、一僧の怖るべき夜叉を見出した。今の二句は汝の唱ふる言かと訊ねると、然りといふので、それならば切に願ふ、早く次の二句を聞かせてくれと請ひ求めたが、夜叉は、今非常に空腹であるから先づ汝の身を吾に獻げよ、然らば教へてやらうといふ。釋尊は直ちに身を躍らして夜叉の口中に飛び入らんとした利那、夜叉の姿は忽然として消え失せ、而して空中より『生滅々已寂滅爲樂』の二句が妙音を以て唱へられた。此は釋尊が修行時に於ける勇猛精進、不惜身命の求道の様子を劇的に誌されたものと見るべきであるが、眞に法を求むる者の態度は、當に斯くまで熱烈なものがなければならぬ。蓮如上人も痛誠を遺されて居る。

佛法には明日ありと思ふべからず、佛法の事は明日のことを今日に引き上げよ。

と。眞に『諸行無常』と知るからは、何をさしをいても、早く正道を求め、『寂滅爲樂』の域に撞入すべく、不惜身命に精進されねばならぬ。

### 第七段 遺教付屬

汝等比丘。常當一心勤求出道。一切世間動不動法。皆是敗壞不安之相。汝等且止。勿得復語。時將欲過。我欲減度。是我最後之所教誨。

汝等比丘、常に當に一心に勤めて、出道を求めよ。一切世間、動不動の法は、皆是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止み、復た語ふことを得ること勿れ。時將に過ぎんと欲す、我れ減度せんと欲す。是れ我が最後の教誨する所なり。

【字解】 ● 求出道 三界六道を解脱する道を求めよとの意。 ● 一切世間 欲界、色界、無色界の三界を總じていふ。 ● 動不動法 動は一心の動亂すること、欲界のこと、不動は色界、無色界のこと、此は心の動亂はないが、矢張り生死輪廻は免れない。 ● 敗壞不安 一切世間の法は、無常なるのみならず、輪廻を免れないから敗壞不安である。一たび勝因縁によつて、比較的樂處に越くとも、因縁盡くれば、また苦地に落ちねばならぬ。是れ三界無安の有様である。 ● 汝等且止

勿得復語。初章の「中夜寂然無聲」の語と文相應して居る。●時將欲過 中夜を以て佛滅度の正時とす。正しき時刻の過ぎざる間に滅度すべしとの意。

【講話】 此の章はいよいよ本經の結辭である。即ち佛陀最後の教誨中の最後の教誨である。初めには自性の障を對治すべきことを明かし、常に一心に出道を求むべしと勸め、終りに汝等且く止みね以下佛陀が世間種々の相を離れて清淨無我の涅槃に入らるゝことを示されてある。

一切世間動不動の法は皆是れ敗壞不安の相なりとは前章の無常の理を重ねて強く喝破せられたるもので「維摩經」に

欲界の六天を動法と爲す。上の二界は壽命劫改長久外道は以て常と爲し、不動法と名づく。

とあり「法華經」には 三界は安きことなし猶ほ火宅の如し。

とある如き此の章と同じ教誨である。斯く一切世間不安と見たからには早く此の反對の出世間大安心の道を勤求せざるを得ない。八大人覺の正道によつ

て専心修行し而して生滅々し已り寂滅を樂と爲すところの、有餘涅槃無餘涅槃に入りて、に佛道の目的を了るのである。

「且く止みね復た語ふこと勿れ」とは諸の弟子達の三業を清淨ならしめらるゝので且く止みねと、身業を止め復た語ふこと勿れと、口業を止め而して此のうち意業はおのづから攝しられて居る。時とは即ち二月十五日の夜半、此は中道を表されたものである。斯くて寂然として聲なき雙林の下、大衆の三業閉塞して肅然たるどころ、佛陀は清淨無我の姿を示して「是れ我が最後の教誨する所なり」の一語を結辭とし、泊然として入滅せられたのである。此の最後の「一語、まことに喫緊叮嚀、永く弟子達をして不斷意を留めて忘失せざらしめんとの慈悲溢るゝ深慮である。

嗚呼、かくして三界の大導師、大恩教主釋迦牟尼世尊は、大涅槃に入りたまうたのである。末法の吾等は面のあたり現前三寶を拜することは出来なないが、歴代祖師の相承によつて、住持三寶を禮することを得、且つ佛陀の御教のまゝに展轉して如實に之れを遵行するところに「如來の法、身常に在して滅せず」一體三寶の

妙徳妙用を、そのまゝ、各自の上に體顯することを得る。是れ教主世尊が最後の教誨に於て明かに保證されたところである。斯の遺教、言々これ佛陀の血である。句々これ佛陀の涙である。苟も佛徒たるもの、これを身材に彫り、これを心に銘し、克く守り克く行ひ、以て佛日をして愈々輝きあらしめんことを努め、佛陀最後の付屬に辜負せざらんことを期すべきである。

### 遺教經講話

## 高島米峯著書目錄

|            |                  |
|------------|------------------|
| 一休和尚傳      | 定價一圓二十錢<br>送料十二錢 |
| 理想的商業      | 定價二十五錢<br>送料四錢   |
| 參學生<br>東洋史 | (品切)             |
| 廣長舌        | 定價七十錢<br>送料十錢    |
| 惡戰         | 定價八十錢<br>送料十錢    |
| 噴火口        | 定價八十錢<br>送料十錢    |
| 店頭禪        | (品切)             |
| 廿歲前後主義     | (品切)             |
| 熱罵冷評       | 定價十一錢<br>送料四錢    |
| 佛心鬼語       | 定價十一錢<br>送料四錢    |
| 四十二章經講話    | 定價一圓五十錢<br>送料十錢  |
| 遺教經講話      | 定價一圓五十錢<br>送料十錢  |

大正十年四月一日印刷  
大正十年四月八日發行

(定價壹圓五拾錢)



著作兼  
發行者  
高島大圓

印刷者  
東京府南足立郡千住町大字  
千住二丁目四十番地  
清泉芳巖

印刷所  
東京府南葛飾郡南綾瀨村  
大字小菅千二百八十四番地  
小菅監獄

### 發行所

東京小石川區原町六  
電話小石川一五八六  
電話小石川一二八

丙午出版社

11  
439

|              |         |                 |
|--------------|---------|-----------------|
| 前田聖雲<br>博士著  | 三論宗綱要   | 定價八錢<br>送料二錢    |
| 齋藤唯信<br>先生著  | 華嚴學綱要   | 定價二圓五十錢<br>送料八錢 |
| 前田聖雲<br>先生著  | 天台宗綱要   | 定價三錢<br>送料十錢    |
| 權田雷斧<br>雷正著  | 密教綱要    | 定價一圓五十錢<br>送料八錢 |
| 權田雷斧<br>雷正著  | 密教奧義    | 定價四錢<br>送料十二錢   |
| 秋野孝道<br>老師著  | 禪宗綱要    | 定價二圓五十錢<br>送料八錢 |
| 清水友次郎<br>學士譯 | 宗教學綱要   | 定價十二錢<br>送料二錢   |
| 加藤咄堂<br>先生著  | 佛教概論    | 定價一圓五十錢<br>送料十錢 |
| 松本文三郎<br>博士著 | 印度の佛教美術 | 定價四錢<br>送料八錢    |
| 權田大村<br>兩先生著 | 佛像新集    | 定價五錢<br>送料八錢    |
| 權田雷斧<br>雷正著  | 曼荼羅通解   | 定價一圓七十錢<br>送料八錢 |
| 長沼賢海<br>先生著  | 惠比須之大黒  | 定價十二錢<br>送料二錢   |

|             |         |                 |
|-------------|---------|-----------------|
| 高島米峯<br>先生著 | 四十二章經講話 | 定價一圓五十錢<br>送料十錢 |
| 高島米峯<br>先生著 | 遺教經講話   | 定價一圓五十錢<br>送料十錢 |
| 加藤咄堂<br>先生著 | 和譯維摩經評注 | 定價七十錢<br>送料十錢   |
| 村上專精<br>先生著 | 科註大乘起信論 | 定價廿五錢<br>送料二錢   |
| 村上專精<br>先生著 | 大乘起信論講話 | 定價一圓七十錢<br>送料十錢 |
| 齋藤唯信<br>先生著 | 俱舍論講話   | 定價十二錢<br>送料二錢   |
| 村上專精<br>先生著 | 科註原人論   | 定價二十錢<br>送料二錢   |
| 加藤咄堂<br>先生著 | 原人論講話   | 定價八錢<br>送料一錢    |
| 境野黃洋<br>先生著 | 天台四教儀講話 | 定價十二錢<br>送料二錢   |
| 加藤咄堂<br>先生著 | 十七憲法講話  | 定價七十錢<br>送料八錢   |
| 境野黃洋<br>先生著 | 八宗綱要講話  | 定價十三錢<br>送料六錢   |
| 釋清潭<br>先生著  | 寒山詩新釋   | 定價八錢<br>送料一錢    |

終

